

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 5 日現在

機関番号：36102

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2011

課題番号：20730142

研究課題名（和文） スコットランド啓蒙の経済思想の歴史的背景と特質—スミスとヘップバーンを中心に

研究課題名（英文） The Historical Contexts and Characteristics of the Economic Thought in the Scottish Enlightenment: Adam Smith and Thomas Hepburn

研究代表者

古家 弘幸 (FURUYA HIROYUKI)

徳島文理大学・総合政策学部・講師

研究者番号：30412406

研究成果の概要（和文）：18 世紀英国のスコットランド啓蒙を担った経済思想として、長老教会牧師であったトマス・ヘップバーンの『オークニー諸島の貧困』（1760 年）と、経済学の創始者とされるアダム・スミスの『道徳感情論』（1759 年）および『国富論』（1776 年）を当時の歴史的な脈に位置づけた。農業における「改良」の推進や、スミスの場合には美的判断（テイスト）の洗練など、両者の思想が啓蒙の思想運動の実践であった側面を提示した。

研究成果の概要（英文）：A Letter (1760) by Thomas Hepburn, a Presbyterian minister, and The Theory of Moral Sentiments (1759) and The Wealth of Nations (1776) by Adam Smith, often regarded as the founder of economics, are put in the historical contexts of the Scottish Enlightenment in eighteenth-century Britain. Both can be understood as Enlightenment practices of envisaging and implementing agricultural improvement and, in Smith's case, of refining aesthetic judgment or taste.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	800,000	240,000	1,040,000
2009 年度	800,000	240,000	1,040,000
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
2011 年度	800,000	240,000	1,040,000
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：経済学 経済学説・経済思想

キーワード：経済学 経済思想 市場経済 経済史 思想史 西洋史 哲学

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 応募者は本研究課題が採択されるまで、アダム・スミス (Adam Smith, 1723-90) を中心に 18 世紀スコットランド啓蒙の経済思想について研究を行い、その成果を英国エディンバラ大学で博士論文に結実させるとともに、国内外で報告・発表してきた。

(2) 従来の研究では、特に経済理論史研究において、スミスはオランダ出身のロンドンの

思想家バーナード・マンドゥヴィル (Bernard Mandeville, 1670-1733) の直系の思想家と解釈されてきた。反対に John Pocock や John Robertson などによる社会思想史研究や、多少の留保付きではあるが Nicholas Phillipson によるスコットランド啓蒙思想史研究などでは、スミスはマンドゥヴィルのコート・ウィッグのイデオロギーに対立するカントリー・ウィッグの系譜に位置づけられてきた。

(3) 応募者の研究は、スミス自身によるマンドゥヴィル批判の論説を検討し、スミスのマンドゥヴィルに対する関係は、上記のいずれでもないとする仮定から出発した。その結果、スミスを含め、フランシス・ハチソン (Francis Hutcheson, 1694-1746) やデイヴィッド・ヒューム (David Hume, 1711-76) など、スコットランド啓蒙の経済思想は、マンドゥヴィルが『蜂の寓話』(1714年)で提示した近代商業社会についての躍如とした逆説、すなわち「公益」は高慢、虚栄、野心といった「私悪」によってのみもたらされ得るとする議論をめぐる「私悪=公益」論争の産物として理解できることを明らかにできた。

(4) スコットランド啓蒙の経済思想の課題は、人々を熾烈な商業的競争へ追いやる貪欲な情念を、いかにして必需品の生産に役立つよう導くか、そして当時の英国において興隆しつつあった新しい近代商業社会において、いかにして持続可能な社会秩序を確立するか、という同時代的な課題に対して、1707年のユニオンで連合王国に新たに加わったばかりのスコットランドの立場から解答を与えることであった。スミスの経済思想も、「私悪」も商業的繁栄のための一方便と見て政策に利用するコート・ウィッグや、逆に商業がもたらす悪徳を非難して古代ギリシア・ローマやアングロ・サクソン時代を理想世界とするカントリー・ウィッグのいずれでもなく、1707年のユニオンで連合王国に新たに加わり、商業的繁栄の果実を享受し始めながらも、ロンドンのコート・ウィッグ政府に対して一定のスタンスをとらざるを得なかったスコットランドの立場を反映していることを、応募者のそれまでの研究では明らかにすることができた。

## 2. 研究の目的

(1) 以上の背景を踏まえて本研究課題では、18世紀スコットランドにおけるより具体的な利害衝突のいくつかの事例をもとに、トマス・ヘップバーンの『オークニー諸島の貧困』(1760年)と、アダム・スミスの『道徳感情論』(1759年)および『国富論』(1776年)を当時の文脈に位置づけ、スコットランド啓蒙の経済思想の歴史的背景と特質の一端を明らかにすることが目的であった。

(2) 本研究課題で取り上げた事例のひとつは、「パンドラー訴訟」と呼ばれる法廷闘争である。オークニー諸島の大地主であったモートン伯爵 (James Douglas, 14th Earl of Morton, 1702-68) と、所領の永代租借地権者であった在地地主たちとの間で、地代を決

める衡量単位をめぐる争われた激しい訴訟である。法廷外では中傷合戦が繰り広げられ、現地の在地地主たちに対するモートン伯爵の「抑圧と圧制」のうわさが喧伝された。

(3) 本研究課題では、この事例を通して、1707年のユニオン以降の貿易の拡大に伴って激化していく経済競争に対応しようとしてスコットランドにおける「改良」を推進する側と、それに対応し切れない地方の伝統勢力との間の対立に、スコットランド啓蒙時代の複雑な光と影が見られる点を示すことが目的の一つであった。オークニー諸島の場合、スコットランド本土よりも経済発展に遅れを取っていた。そのため、競争力向上を図ろうとした本土出身の貴族と、地元へ根づく所領経営者との対立は、それだけ激しくなりがちであった。「パンドラー訴訟」は、そのような利害対立の典型例を示している。

(4) 本研究課題では、ヘップバーンの『オークニー諸島の貧困』を、「パンドラー訴訟」について論じた同時代の文献として取り上げた。スミスの『国富論』も含め、スコットランド啓蒙の経済思想が、「改良」を推進する側に立ちながら明るい将来展望を肯定するために普遍的な社会原理を提示しようとした背景に、当時の新しいユニオン体制下における商業的競争をめぐる利害対立と政治的抗争が大きな問題として存在していた側面を明らかにすることも、本研究課題の目的であった。

## 3. 研究の方法

(1) 2008年7月から9月にかけて、英国スコットランドのエディンバラ大学、およびオークニー諸島の図書館や文書館へ赴いて多くの資料を収集・分析した。また2009年7月から9月にも、エディンバラの大学図書館や国立図書館、文書館へ赴いて多くの資料を収集・分析した。現地では入手できない資料の収集、文献調査は、国内での学会・研究会発表だけでなく、「パンドラー訴訟」についての研究論文「スコットランド啓蒙時代の光と影—18世紀オークニー諸島の事例から」の執筆と、トマス・ヘップバーンの『オークニー諸島の貧困』についての英語による研究論文『Working the Peripheral into the Picture: The Case of Thomas Hepburn in Eighteenth-Century Orkney』、および日本語による研究論文「最果ての啓蒙—トマス・ヘップバーンの経済思想と18世紀オークニー諸島 (1) (2)」の執筆・出版に、大いに資する結果となった。

(2) 2010年以降、欧州経済思想史学会 (ESHET) と、北米経済学史学会 (HES)、または海外での夏季の国際学会、および国内の学会における個別研究発表を、毎年少なくとも三回ずつ行うという研究サイクルを確立し、研究論文の執筆と出版を継続的に進めてきた。

#### 4. 研究成果

(1) 2008年5月の西洋史学会第58回大会 (島根大学) における個別研究報告「スコットランド啓蒙時代の光と影—オークニー諸島の事例から」と、同年10月の近世イギリス史研究会第17回例会 (大阪大学) における個別研究報告「スコットランド啓蒙時代の「改良」をめぐる」と、および2010年7月の Early Modern Studies Conference (University of Reading, UK) における個別研究報告 'The Pundlar Process and Eighteenth-Century Orkney' をもとに、トマス・ヘップバーンの著書『オークニー諸島の貧困』の背景にあった「パンドラー訴訟」についての国内外初の研究論文「スコットランド啓蒙時代の光と影—18世紀オークニー諸島の事例から」を執筆した。「パンドラー訴訟」や、それを論じた『オークニー諸島の貧困』が、離島のオークニー諸島にありながらも、「改良」の推進など、スコットランド啓蒙の思想運動の実践であった一側面を明らかにする論考である。また当時のスコットランドで「改良」の時代思潮が必ずしも均一に受け入れられたわけではない点も示した。この論文は改訂の上、共同論文集の一章として出版の予定である。また著書『物語 経済史』(ふくろう出版) でも、研究成果の一端を反映させることができた。

(2) 2009年3月の経済学史研究会第195回例会 (関西学院大学) における個別研究報告「トマス・ヘップバーン『オークニー諸島の貧困』(1760年) について」と、同年5月の経済学史学会第73回大会 (慶應義塾大学) における個別研究報告「トマス・ヘップバーンと18世紀オークニー諸島」をもとに、スコットランド教会の穏健派に属したトマス・ヘップバーンの『オークニー諸島の貧困』についての国内外初の研究論文を執筆し、「最果ての啓蒙—トマス・ヘップバーンの経済思想と18世紀オークニー諸島 (1)(2)」として『経済学論究』に出版した。『オークニー諸島の貧困』を当時の文脈に位置づけることで、スコットランド啓蒙の経済思想の歴史的背景として、1707年のユニオン以降の貿易の拡大に伴って激化していく経済競争をめぐる利害対立と政治的抗争が大きな問題として存在していた点を明らかにすることが

できた。また穏健派の経済思想が従来論じられてきたよりも多様な問題関心と射程を持っていたことを指摘することもできた。本研究の課題である「スコットランド啓蒙の経済思想の歴史的背景と特質」を明らかにする上で、出発点となる論点の一つを提示できた。

(3) 2010年3月の The 14th Annual Conference of the European Society for the History of Economic Thought (The Amsterdam School of Economics, University of Amsterdam, The Netherlands) における個別研究報告 'Thomas Hepburn and Eighteenth-Century Orcadian Economy: The Moderate Economic Thought of Edinburgh Reconsidered' をもとに、トマス・ヘップバーンの著書『オークニー諸島の貧困』についての研究論文 'Working the Peripheral into the Picture: The Case of Thomas Hepburn in Eighteenth-Century Orkney' を、経済学史の分野における世界三大学術誌の一つである *The European Journal of the History of Economic Thought* (London, UK: Routledge) に出版した。ヘップバーンの著書を、「改良」をめぐる当時の議論の文脈に位置づけることで、本研究の課題であるスコットランド啓蒙の経済思想の歴史的背景と特質の核心部分を明らかにすることができた。本論文は、所収の *The European Journal of the History of Economic Thought* の巻の編集者による冒頭論文において、経済学が機能する現場から経済学史を捉えるという近年の研究の先端に位置付けられて評価された。またスコットランド研究の大御所とも言える T. C. Smout 教授 (Historiographer Royal in Scotland) からは、18世紀史の研究者にマイナーなトピックを明瞭な分析で提示した質の高い論文との評価を頂いた。

(4) アダム・スミスの道徳哲学の基礎にあるテイストの言語についての英語論文 'A Language of Taste in the Moral Philosophy of Adam Smith' を、国内最古の英文経済学術誌である *The Kyoto Economic Review* (Kyoto, Japan: Kyoto University Press) に出版した。この論文を踏まえて、2010年12月のイギリス哲学会第43回関西西部会研究例会 (キャンパスプラザ京都・京都大学サテライト講習室) における個別研究報告「アダム・スミスとストア哲学—キケロ『カトー』から商人地主像へ」と、2011年3月のイギリス哲学会第35回研究大会 (京都大学) における個別研究報告「アダム・スミスにおけるストア哲学の言語—ポリティカル・エコノミーへの道」を行い、スミスの倫理学における感情についての議論や、経済学における価値や価格についての議論の記述を支えたテイ

ストの言語が、ストア哲学とキケロを起源として構成されていくプロセスについて、最初の研究成果を発表できた。「スコットランド啓蒙の経済思想の歴史的背景と特質」のなかで、従来あまり触れられることのなかった側面を取り上げることができた。

(5) 2011年5月のThe 15th Annual Conference of the European Society for the History of Economic Thought (Bogazici University, Istanbul, Turkey)における個別研究報告‘From Stoic Philosophy to a Language of Political Economy in Adam Smith’と、同年6月のThe Annual Conference of the History of Economics Society (Notre Dame University, South Bend, Indiana, US)における個別研究報告‘Adam Smith and Stoic Philosophy: From Cicero’s *Cato* to an Image of the Merchant-Landowner’をふまえ、アダム・スミスの『道徳感情論』と『国富論』に共通する美についてのストア哲学的概念の生成についての英語論文‘Beauty as Independence: Stoic Philosophy and Adam Smith’を執筆した。*The Kyoto Economic Review*に掲載が決定している。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計14件)

①古家 弘幸「アダム・スミスにおける美的判断の理論」『イギリス哲学会第36回総会・研究大会プログラム・報告要旨』(イギリス哲学会、2012年3月): p. 14. 査読有

②古家 弘幸「書評 小峯敦・編著『経済思想のなかの貧困・福祉—近現代の日英における「経世済民」論』(ミネルヴァ書房、2011年)』『大原社会問題研究所雑誌』(法政大学大原社会問題研究所、2012年2月)第640号: pp. 80-84. 査読有

③ Hiroyuki Furuya, ‘Working the Peripheral into the Picture: The Case of Thomas Hepburn in Eighteenth-Century Orkney’, *The European Journal of the History of Economic Thought*, 18 (5) (London, UK: Routledge, December 2011): pp. 697-714. 査読有

④ Hiroyuki Furuya, ‘Adam Smith and Stoic Philosophy: From Cicero’s *Cato* to an Image of the Merchant-Landowner’, in *The*

*History of Economics Society (HES) 2011 Conference Program* (June 2011), p. 18. 査読有

⑤ Hiroyuki Furuya, ‘From Stoic Philosophy to a Language of Political Economy in Adam Smith’, in *The 15th Annual Conference of the European Society for the History of Economic Thought (ESHET), Competition, Innovation and Rivalry* (May 2011), p. 43. 査読有

⑥古家 弘幸「アダム・スミスとストア哲学—キケロ『カト』から商人地主像へ」『イギリス哲学研究』第34号(イギリス哲学会、2011年3月): pp. 144-145. 査読有

⑦古家 弘幸「アダム・スミスにおけるストア哲学の言語—ポリティカル・エコノミーへの道」『イギリス哲学会第35回総会・研究大会プログラム・報告要旨』(イギリス哲学会、2011年3月): p. 19. 査読有

⑧古家 弘幸「最果ての啓蒙—トマス・ヘップバーンの経済思想と18世紀オークニー諸島(2)」『経済学論究』第64巻第4号(2011年3月): pp. 139-158. 査読有

⑨古家 弘幸「最果ての啓蒙—トマス・ヘップバーンの経済思想と18世紀オークニー諸島(1)」『経済学論究』第64巻第3号(2010年12月): pp. 179-203. 査読有

⑩ Hiroyuki Furuya, ‘A Language of Taste in the Moral Philosophy of Adam Smith’, *The Kyoto Economic Review*, 79 (1) (Kyoto, Japan: Kyoto University Press, June 2010): pp. 40-65. 査読有

⑪ Hiroyuki Furuya, ‘Thomas Hepburn and Eighteenth-Century Orcadian Economy: The Moderate Economic Thought of Edinburgh Reconsidered’, in *The 14th Annual Conference of the European Society for the History of Economic Thought (ESHET), The Practices of Economists in the Past and Today* (March 2010): p. 47. 査読有

⑫古家 弘幸「『人物で読む経済学史』と『物語 経済史』について」『証券奨学同友会報』(証券奨学同友会、日本証券奨学財団、2009年9月)第35号: pp. 21-24. 査読有

⑬古家 弘幸「トマス・ヘップバーンと18世紀オークニー諸島」『経済学史学会大会報告集—第73回全国大会』(経済学史学会、2009年5月): pp. 118-123. 査読有

⑭古家 弘幸「スコットランド啓蒙時代の光と影—オークニー諸島の事例から」『西洋史学会第 58 回大会報告要旨集』（西洋史学会、2008 年 5 月）： p. 40. 査読有

〔学会発表〕（計 11 件）

①古家 弘幸「アダム・スミスにおける美的判断の理論」イギリス哲学会第 36 回研究大会、国際基督教大学（2012 年 3 月）。

②Hiroyuki Furuya, ‘Adam Smith and Stoic Philosophy: From Cicero’s *Cato* to an Image of the Merchant-Landowner’, The Annual Conference of the History of Economics Society (HES), Session: ‘Adam Smith, Desire and the Long Run’, Notre Dame University, South Bend, Indiana, US (17-20 June, 2011).

③ Hiroyuki Furuya, ‘From Stoic Philosophy to a Language of Political Economy in Adam Smith’, The 15th Annual Conference of the European Society for the History of Economic Thought (ESHET), ‘Competition, Innovation and Rivalry’, Session A.4: ‘Adam Smith - 1’, Bogazici University, Istanbul, Turkey (19-21 May, 2011).

④古家 弘幸「アダム・スミスにおけるストア哲学の言語—ポリティカル・エコノミーへの道」イギリス哲学会第 35 回研究大会、京都大学（2011 年 3 月）。

⑤古家 弘幸「アダム・スミスとストア哲学—キケロ『カトー』から商人地主像へ」イギリス哲学会第 43 回関西西部会研究例会、キャンパスプラザ京都・京都大学サテライト講習室（2010 年 12 月）。

⑥Hiroyuki Furuya, ‘The Pundlar Process and Eighteenth-Century Orkney’, The University of Reading Early Modern Studies Conference, ‘Controversy, Protest, Ridicule, Laughter, 1500-1750’, Session 4.1: ‘Political and religious controversy in Scotland, 1660-1750’, The Palmer Building, Early Modern Research Centre, University of Reading, Reading, UK (9-11 July, 2010).

⑦Hiroyuki Furuya, ‘Thomas Hepburn and Eighteenth-Century Orcadian Economy: The Moderate Economic Thought of Edinburgh Reconsidered’, The 14th Annual

Conference of the European Society for the History of Economic Thought (ESHET), ‘The Practices of Economists in the Past and Today’, Session B.6: ‘British economists in the 18th century’, The Amsterdam School of Economics, University of Amsterdam, Amsterdam, The Netherlands (25-27 March, 2010).

⑧古家 弘幸「トマス・ヘップバーンと 18 世紀オークニー諸島」経済学史学会第 73 回大会、慶應義塾大学（2009 年 5 月）。

⑨古家 弘幸「トマス・ヘップバーン『オークニー諸島の貧困』（1760 年）について」経済学史研究会第 195 回例会、関西学院大学（2009 年 3 月）。

⑩古家 弘幸「スコットランド啓蒙時代の「改良」をめぐって」近世イギリス史研究会第 17 回例会、大阪大学（2008 年 10 月）。

⑪古家 弘幸「スコットランド啓蒙時代の光と影—オークニー諸島の事例から」西洋史学会第 58 回大会、近世史・近代史部会、島根大学（2008 年 5 月）。

〔図書〕（計 2 件）

①古家 弘幸『物語 経済史』（ふくろう出版、2008 年 9 月）： pp. 206.

〔その他〕  
ホームページ等

研究成果データベース

<http://researchmap.jp/read0144022>

<http://jglobal.jst.go.jp/public/2009042/200901007328533106>

所属研究機関が作成した研究内容又は研究成果に関する web ページ

<http://www.bunri-u.ac.jp/about/edu-info/pdf/teacher/1050039.pdf>

[http://ss.pt.bunri-u.ac.jp/syllabus/teacher\\_ichiran.php?ID=1050039&FACID=8A&year=2012](http://ss.pt.bunri-u.ac.jp/syllabus/teacher_ichiran.php?ID=1050039&FACID=8A&year=2012)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

古家 弘幸 (FURUYA HIROYUKI)

徳島文理大学・総合政策学部・講師  
研究者番号：30412406

(2) 研究分担者  
( )

研究者番号：

(3) 連携研究者  
( )

研究者番号：